

気管分岐部を閉塞する猫のポリープ型扁平上皮癌に対し気管支鏡下に高周波スネア切除およびアルゴンプラズマ凝固を行い、長期 QOL 維持可能であった 1 例

相模が丘動物病院 呼吸器科

○城下幸仁（シロシタユキヒト）

症例は、雑種猫、避妊済メス、11 歳 11 カ月齢。2 週間前より喘鳴が出現し失神もあった。前医 CT にて気管分岐部ポリープ型腫瘍と診断され、精査加療希望のため呼吸器科受診。体重 3.0kg、呼吸数 24 回/分。吸気努力、削瘦あり。聴診にて wheezes、高炭酸ガス血症 (Paco₂ 49 mmHg)、胸部 X 線にて肺過膨張あり。気管支鏡検査にて気管分岐部直前に気道を 90% 閉塞するやや広基性のポリープ状隆起病変を認め、気管支鏡観察下に高周波スネア切除およびホットバイオプシー鉗子にて切除し気道開存した。術後著明に症状は改善した。病理組織診断は扁平上皮癌であった。1 ヶ月後残存病巣に対しアルゴンプラズマ凝固を行った。根治的外科療法はリスクを考慮し行わず、NSAIDs 内服継続およびカルボプラチン静脈単回投与にて経過観察した。在宅にて良好に経過していたが、処置後 446 日目に局所再発のため呼吸困難となり安楽死となった。獣医療では気管支鏡下高周波治療の報告はなく、御意見御指導下さい。